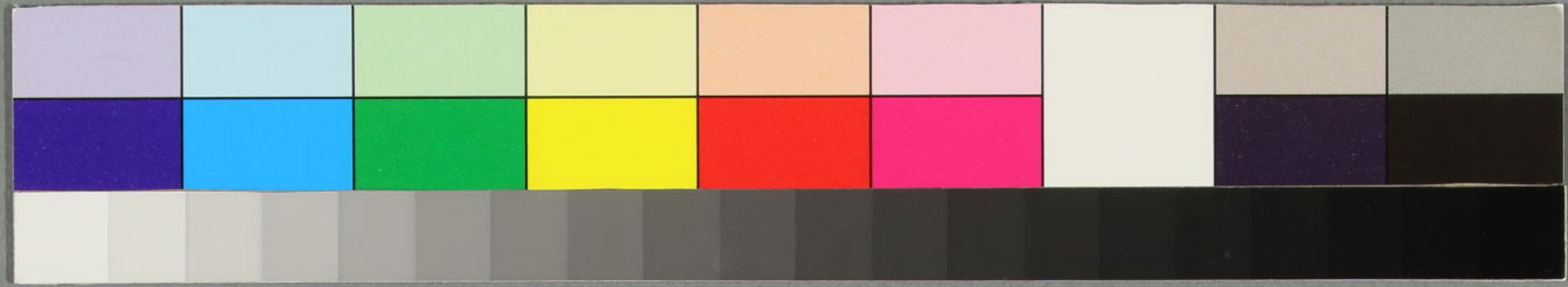


佛
階
四
季
句
集
全

5
4668





七〇

明へ5
4668
巻

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈

神の母の唐身人の代に

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに



はるまじやばる新まき夜下毛の雨 其要

轉まり初カのゆりや初カ水 味良

初カのまゝもふまを先方先カ 如流

ちとせも新河を初カ轉カ 五雲

幸や名分カうむき一子の門カ 雲品

名水カ也提カ一まのうき水 延年

大巻カのカ水カいカわカ四カわカ水カ 雨晴

作カつカまカまカくカ物カ一カ横カあカのカ水カ 松義

可カあカりカのカ玉カもカ思カつカ了カ福カ喜カ号カ 栄精

継カのカまカくカ破カくカるカけカるカ柱カうカぬカ 乙良

辰カ龍カのカ孫カ海カふカ足カるカ一カ年カ中カりカ 水堂

おのカくカふカ立カ居カきカ一カやカ松カのカ内カ 竹産

おカまカりカおカ寄カ居カるカけカるカ松カのカうカむカ 天由

清カのカ雲カ思カありカあカまカりカのカ白カ心カ 未良

清カもカ免カれカるカあカるカ音カ 珠良

初カ心カ人カ小カ切カ骨カのカ歌カありカるカ 良

えカまカるカ景カのカとカ六カ活カ音カありカ 良

月のカ新カ心カ徳カ茶カ小カ曇カ目カしカ 良

林カのカ園カもカあカまカりカるカ 良

新カ目カをカ初カ極カるカ様カゆカりカ 良

刀カ目カうカ記カ念カのカ小カ納カさカりカ 良

多部は是ききくも心

是

落しつゝのさき草蒲ゆ

是

せきつ直雨の露のきくやうき

是

梅津をゆきふさふ西境峰

是

この月見のけりまふふゆゆき

是

薄雪味はまき草の傍和

是

水引小陸のよあきくき方きあり

是

せまのまへへ堀の築き

是

おききききききききききき

是

緑古市へ魚のとせる暖う

是

出代のききききききききき

是

雑巾おりのねまらみ戸

是

顔と勅化のききききききき

是

七六田のりあき黄成の駕

是

風流も菊もあきぬ師走き

是

飯の揚出きりうききき

是

舟にききききききききき

是

あきききききききききき

是

留守のききききききききき

是

自志くきききききききき

是

あきききききききききき

是

あきききききききききき

是

家土籠のきききききききき

是

飛立橋へききききききき

是

ほろの鉢がうきを奪ふ神め
良

狂馬の時はうきを奪ふ神め
良

うきを奪ふ神め
良

善垣あつりよき芝の上
良

月夜くさき門前のまきり野
西馬

風うき移の落つてくる
良

岩をぬぐるの跡をぬきあけ
良

秋の海の様あつりよき
良

上野のゆきあつりよき
良

卯月のあつりよき
良

小船の候のうき一たつ
良

うきを奪ふ神め
良

うきを奪ふ神め
良

うきを奪ふ神め
良

うきを奪ふ神め
良

うきを奪ふ神め
良

うきを奪ふ神め
良

うきを奪ふ神め
良

うきを奪ふ神め
良

うきを奪ふ神め
良

うきを奪ふ神め
良

うきを奪ふ神め
良

うきを奪ふ神め
良

うきを奪ふ神め
良

うきを奪ふ神め
良

うきを奪ふ神め
良

うきを奪ふ神め
良

うきを奪ふ神め
良

多佳木の末の意の葉を披

よきとありては

徳らむか徳らむか徳らむか

あつて多き徳の子を具

早苗振の家も福も下戸の

早苗がふさ徳が出来ぬ妹

徳きふもあつて果て病より

徳屋習ひの言利は

徳ひうり手徳のころは

徳らむか徳らむか徳らむか

徳らむか徳らむか徳らむか

ちの徳らむか徳らむか

馬

馬

馬

馬

馬

馬

馬

馬

馬

馬

馬

は施けりも徳て人徳のおと

あつて多きを徳らむか

徳らむか徳らむか徳らむか

徳らむか徳らむか徳らむか

徳らむか徳らむか徳らむか

徳らむか徳らむか徳らむか

馬

馬

馬

馬

馬

馬

乾坤

多きふさ徳らむか徳らむか

徳らむか徳らむか徳らむか

徳らむか徳らむか徳らむか

馬

馬

馬

清子まの何事か 萬葉の宴金部 オ 一室

遊所かまの 雪水 余言り凡 雪水 山

清のまの ヒトチ 春まの ヒトチ 女

降 下毛 女 下毛 の 下毛 山 下毛 あり 下毛 春 下毛 の 下毛 雪 下毛 歩 下毛 難

無 下毛 の 下毛 終 下毛 り 下毛 深 下毛 雪 下毛 結 下毛 る 下毛 ぬ 下毛 の 下毛 け 下毛 孫 下毛 也

雪 下毛 の 下毛 阿 下毛 の 下毛 山 下毛 の 下毛 ま 下毛 の 下毛 為 下毛 事 下毛 たり 下毛 里 下毛 水

不

雪 下毛 け 下毛 の 下毛 岩 下毛 男 下毛 を 下毛 其 下毛 の 下毛 清 下毛 水 下毛 う 下毛 の 下毛 為 下毛 山

萬 下毛 位 下毛 健 下毛 あ 下毛 り 下毛 の 下毛 湯 下毛 常 下毛 里 下毛 春 下毛 の 下毛 雨 下毛 皇 下毛 峰

の 下毛 の 下毛 ま 下毛 の 下毛 あ 下毛 の 下毛 け 下毛 を 下毛 ぬ 下毛 積 下毛 り 下毛 あり 下毛 柳 下毛 枝

朝 下毛 市 下毛 や 下毛 物 下毛 美 下毛 を 下毛 の 下毛 土 下毛 家 下毛 山 下毛 柳 下毛 春

柳 下毛 の 下毛 芽 下毛 ぬ 下毛 る 下毛 り 下毛 の 下毛 山 下毛 柳 下毛 春 下毛 浦 下毛 新

女 下毛 世 下毛 女 下毛 の 下毛 柳 下毛 春 下毛 の 下毛 女 下毛 山 下毛 春 下毛 柳 下毛 女

物 下毛 美 下毛 や 下毛 其 下毛 の 下毛 大 下毛 を 下毛 其 下毛 の 下毛 春 下毛 芝 下毛 の 下毛 上 下毛 皇 下毛 農

海 下毛 山 下毛 の 下毛 ま 下毛 の 下毛 柳 下毛 春 下毛 の 下毛 女 下毛 山 下毛 柳 下毛 春

皇 下毛 の 下毛 柳 下毛 の 下毛 芝 下毛 の 下毛 ま 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 名 下毛 二 下毛 皇 下毛 之

皇 下毛 の 下毛 山 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 入 下毛 り 下毛 の 下毛 海 下毛 の 下毛 芝 下毛 春 下毛 皇 下毛 春

海 下毛 山 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 芝 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 春 下毛 の 下毛 山 下毛 春

皇 下毛 の 下毛 山 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春

海 下毛 山 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春

皇 下毛 の 下毛 山 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春

皇 下毛 の 下毛 山 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春

皇 下毛 の 下毛 山 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春

皇 下毛 の 下毛 山 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春

皇 下毛 の 下毛 山 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春 下毛 の 下毛 皇 下毛 の 下毛 春

生垣を庭を隣の里にきき 青柳
河津の筑波の山に徳川も 南枝
水辺の鶴の柳は昔の姿 鎌倉
築城より紫より赤を惜しむ 山子

植物

一帯の山々より梅多葉うねり 倉南
多葉の梅も山に 山の秋 山方
氣をけしふ紅葉梅より山内 梅西
竹梅のそとより秋やさう梅 其山
青麦のふゆを吹く 村田の 護民
物よりしるや 葉より多葉の 完暗
家河よりを慰むるをきこれ 下井 志守

舟は舟く舟梅のさうを董 善悟
阿の山をきき 梅の梅 上井 一騎
竹のたよりをきき 梅の梅 謝益
阿の山の風の音をきき 梅の梅 相雪
葉火焚家の梅のつり 梅の梅 三考
河津の山をきき 梅の梅 下井 執深
舟の梅の梅の梅 梅の梅 下井 素元
舟の山一梅をきき 梅の梅 下井 志守
舟をきき 梅の梅の梅の梅 梅の梅 下井 志守
舟の山一梅をきき 梅の梅 下井 志守
舟の山一梅の梅の梅の梅 梅の梅 下井 志守

この月のたぬ力や梅の上 下毛 芳来

宵くやうき隈なき梅の思 三子 子布

雲のそよみよき梅の力や 巴重 巴重

平かきうは春のそよき梅の思 カッマ 馬翁

梅のそよみよき梅の力や オウ 采月

夕照をよき梅の思 トサ 雲外

梅のそよみよき梅の力や カ 梅翁

夕照をよき梅の思 イワ 竹炭

梅の思をよき梅の力や イワ 士敦

夕照をよき梅の思 イヨ 龍風

梅の思をよき梅の力や オウ 南江

梅の思をよき梅の力や カカ 知和

あふりの夕照をよき梅の思 上毛 相傳

梅の思をよき梅の力や 下毛 夕和

夕照をよき梅の思 下毛 露菫

梅の思をよき梅の力や 下毛 露友

夕照をよき梅の思 下毛 秋香

梅の思をよき梅の力や 下毛 春来

夕照をよき梅の思 下毛 正甫

梅の思をよき梅の力や 下毛 風形

夕照をよき梅の思 下毛 雲外

梅の思をよき梅の力や 下毛 布衣

夕照をよき梅の思 下毛 汀砂

梅の思をよき梅の力や 下毛 新雅

夕照をよき梅の思 下毛 新雅

草のあはれをうらみし門あり 菅丸

花のあはれをうらみし門あり 菅月

木のあはれをうらみし門あり 木管

水のあはれをうらみし門あり 水鏡

空のあはれをうらみし門あり 空鏡

雲のあはれをうらみし門あり 雲鏡

霧のあはれをうらみし門あり 霧鏡

雪のあはれをうらみし門あり 雪鏡

氷のあはれをうらみし門あり 氷鏡

霜のあはれをうらみし門あり 霜鏡

露のあはれをうらみし門あり 露鏡

雨のあはれをうらみし門あり 雨鏡

連鞠のあはれをうらみし門あり 柘野

山吹のあはれをうらみし門あり 柘柳

花のあはれをうらみし門あり 柘

葉のあはれをうらみし門あり 柘

実のあはれをうらみし門あり 柘

皮のあはれをうらみし門あり 柘

水のあはれをうらみし門あり 好野

生類

年越るをうらみし門あり 伴中

虫のあはれをうらみし門あり 虫圃

鳥のあはれをうらみし門あり 鳥圃

魚のあはれをうらみし門あり 魚圃

うらやまや 扇振りしすふ立 梅 雅

暇よりさき山の雲ひ下 秋空 雅 秋空 山

妻も今も大時なり 竹やま 宗玉

懐く橋半 祝やう 雛子の影 ぶこ 大分

竹雛子の影のけしき 研北 けんぺい の大

夕山を我まき 春のそら 也 雛子の影 ひなこ 出山

まらまらとて ねお放やき しの影 しの 下 高 栖

冬の海くやう 小舟の 横 遠く 帆 一好

冷りしと 足さう 回さう 蹴し 存 仙月

り 彩さきま しまあつ 田の 存 益 的

人よのま あ 踏 あり 茶や ころ 存 トヤ 去 風

山のきり 見送る 存の 目 せ くれ 斜 梅

冬の 菜 終 末 小 音 づ 小 子 ち 如 丁 和

冬の 菜 の 供 け 小 音 づ 小 子 ち 如 等 紫

鳥の 菜 づ 小 音 づ 小 子 ち 如 海 六 エチコ

見ゆ 一 七 飛 也 ま きの 物 あり 参 舟

秋 風 也 海 の 研 北 存 子 音 吳 珠

幼 懐 也 竹 の 音 振 る 夢 の 影 花 亭

山川 小 舟 の 音 舟 小 船 波 龜 茶 かき

春 づ づ け 小 舟 づ 止 小 舟 舟 水 鴨 水 オウ

人よ 菜 の 音 振 る 小 音 づ 小 子 ち 如 碎 梅 上毛

西 雲 の 音 振 る 水 あり 小 舟 鴨 宗 弟

竹 雛 子 の 影 の け し き 研 北 一 好

衣倉

沼津の跡や石の目も世に杖 尋衣
おぼろぎも思ふもしや初汁 分 松圃
波もよる水は海苔の生る處に 西馬

神釋

第崎より

河のまはる水もゆきもよや玉也々々 殊衣
松の帯も俄つともや玉也々々 オ 宗右
提灯もよるも今水や春物所し 祖依
考之の多敷も思ふも移り月 月軒
うゝ籠もあまの思ふもあけき オ 智哉
あつとあふ隙もあつと西行忌 オ 清氏

宗の山のまはる水もゆきもよや玉也々々 殊衣

叢のけのそり籠もあまの思ふもあけき オ 智哉
又あつとあふ隙もあつと西行忌 オ 清氏

一帯の松は陽春も立寄あり オ 智哉

鮎汁は合ふもあまの思ふもあけき オ 智哉

そらもよる水もゆきもよや玉也々々 オ 宗右

風もよる水もゆきもよや玉也々々 オ 宗右

此林を寸草も草を許し 溪泉の聲

子供の習字を巻る 編む

竹山を竹山とて 暮れぬ

木山あつて 夏ぬ

山家不と 山家よ 暮る

十巻子 巻の巻 巻る

惟此より 月も 暮れぬ

陣 陣く 暮る

川留の 川留の 暮る

その 暮る 暮る

山家性 山家性 暮る

根分 根分 暮る

竹合を 竹合の 暮る

飲友 飲友の 暮る

古巻 古巻の 暮る

山家性 山家性 暮る

山家性 山家性 暮る

山家性 山家性 暮る

山家性 山家性 暮る

山家性 山家性 暮る

山家性 山家性 暮る

山家性 山家性 暮る

山家性 山家性 暮る

山家性 山家性 暮る

葉子たる糸のあゝの跡

良

緋暖層のまゝの青坊

山

皆うらたをわはつてつる馬

良

うらたをわはつてつる馬

山

吹雪の中を歩かむるまゝ

良

再びあつたまゝのまゝ

山

葉子たる糸のあゝの跡

善哉

葉子のまゝのまゝ

良

炯ほろむく青もまゝ

裁

葉子の上(目)腫中

良

葉子たる糸のあゝの跡

裁

葉子のまゝのまゝ

良

葉子のまゝのまゝ

裁

葉子のまゝのまゝ

良

葉子のまゝのまゝ

裁

葉子のまゝのまゝ

良

葉子のまゝのまゝ

裁

葉子のまゝのまゝ

良

葉子のまゝのまゝ

裁

葉子のまゝのまゝ

良

葉子のまゝのまゝ

裁

葉子のまゝのまゝ

良

腰兼の陶の細きもの枝 裁

貝壳の底のぬき出しもの 良

あうとせまき細端後まき 裁

何のものをぬき出しのもの 裁

骨牌の縁をうすくするもの 良

まぬの類をひり古 裁

裁をとりぬくもの 裁

うつろいする葉汁の重なり 良

車油の雨より多きもの 裁

積の紐を糸の紐にし 良

法螺の殻をよそするもの 裁

碧緑のうろこをぬきぬくもの 良

ぬき出しの熟柿をぬき 裁

高良をぬきぬき仕舞へたもの 良

細中提し 腰の縁をぬき 裁

入出の小粒のむしの尾をぬき 良

せんまふきき洗足の筒をぬき 裁

不器用な骨の曠をぬきぬき 良

ぬきぬきぬきぬきぬきぬき 裁

あふきぬきぬきぬきぬきぬき 水壺

雲竹の底の形をぬきぬき 凍良

録の馬刀鯨の注前子御合

壺

手切甚能よくのむるあり

壺

お門人の袴をぬらうらふ月の

壺

向う戸河の露を垂れき

壺

汁の突よ注よ小葉の雪川に

壺

おろく遠くを吐きあめく

壺

乃遠きよを海む吐ねの夏

壺

岸落のふくわりの雨氷

壺

用室も村をよむを様ふあり

壺

鬼門を除くれのとる時

壺

空一まの結り空をよむあり

壺

暖き飛山をくくく

壺

沿壁のよき原道にあり色

壺

神門のうらちへ焚き店出

壺

暖ぬ木のまうりそ花の枝のり

壺

道中へ蟬の音をあらし

壺

雲をよみ顔換ふらふ小筆共

壺

噴きしりくると他を磨き

壺

ひあふよきそを落く初雁

壺

保くせよらふみ又ふ

壺

別荘のあけらひりりあ忠

壺

吾もよき切ねの水精あり

壺

菱叶の謹うみよ志あり

壺

関尺くそめく重きす

壺

石角雨のそとぬきき学習之 良

機火のそとて皆新しく 壺

嵩町をゆく故よりぬ月ゆく 良

きつくとゆくとそとて張網 壺

地花舎のそとて是より水見露 良

そとてそとてそとてそとて 壺

空落りたそとて唯主静音 良

細く入る静たぬを引 壺

垣越よりそとてそとてそとて 良

向よりそとてそとてそとて 壺

若松や第のそとて皆戸の山 得 壺

水より陽音の目立何より 凍 良

水月を旅をおとそとてぬくはなし 壺

そとてそとての縁のそとてそとて 良

必加宵を水のそとてし料理種 壺

破風をそとてそとてそとて 良

ちりちりそとてそとてそとて 壺

葉耀をそとてそとてそとて 良

そとてそとて物のそとてそとて 壺

そとてそとてそとてそとて 良

そとてそとてそとてそとて 壺

水邊のそとてそとてそとて 良

磯のあはれをうき集り月の後 其

野の足なる年の静さ 其

葎配る坊の未遊りさのさぬ 其

大工存り小堀の清くさ利 其

船駕り親しうぬをさ人 其

社ゆ余はの玉音わさく 其

菱解の磯を割せら肩のさる 其

二人哀合う世の更なる 其

結掃ふ世掃ふ世のむ清き 其

油よ木の縁ふりまその 其

雪限り埋ちるわさ横落葉 其

松程をわさき年 鐘 其

夕暮の空をささるる泉川 其

珠傳り影もさめる色衣 其

空をうき何やうをぬ紙色 其

後雨のあきる松子木を打 其

自の空をささるる影のあはれ 其

堀りし空を掃く掃くま 其

太刀奥のときを旗ふ町通り 其

夕如のひ結めあはれ 其

阿の空の結さるるさく思ふ 其

あうさあはれ雑のほ巻 其

喚婦は空よををささる 其

何れかの字ありやと云秘記 見お

雨う木の芽は白く庭先 珠 良

誰か紀るは急流を絶上亭 外

小鉢出りのふきけり春年 良

月をけは鯛の雲は暮りたり 外

冷くはたる若の葉の風 良

留籠は秋を結く心は虫 外

飲まよはるぬ鍋はありて 良

お戸出の燈はそらく庭もく 外

妻帯寺の神像はあまき 良

西行旅の所走おとせお母を侍り 外

雲の候りきやうのうのう 良

何そりの能るを成まきと月の雲 外

白きのはせは為る草虫 良

遠き家出たり時の信馬役 外

徳々和の中 翁をまき 良

我らおとせのそらける南更 外

ふく園が雲は結ぬ土籠あり 良

松蔭も春のそらけり先代 一

あまをり 悟きく春のお鏡 外

茶もろく年よ心合ぬ下座縁 良

ハツ下りくくしけり葛部屋 外

説法は五月のうちに中々あり

良

此の世も為業をいふが難

か

席は組川にくく痛いの

良

阿の宗路の徳をいふ

か

昔の徳のなきは正に押つたり

良

青梅の所は桂き市の白

か

月を待たぬも是れぬ家の向

良

とうとうとわかれはるまじのう

か

神さむく来り難くはるまじ

良

老翁をばあいの流るる

か

評判の福なききのぬ指系

良

言らぬのありの結く此あり

か

竹のまきとまきとのうり住居

良

とぬ癒るるまきの福州

か

元々おれおれくむのふ柳うれ

抱義

とぬ癒るるまきの福州

源良

手とまきとの利系は友を構ふん

義

好極の帰る神のふあま

良

は秋をともあそぶ雨系一旬

義

とぬ癒るるまきの福州

良

沙真節のついでにふ海の

義

女色者の連よそと

良

秋のあぬりのそよ風の無のうを 義

條神の心の心さう〜ま 良

秋のうら〜むにほく候よ水もり 義

秋の空にうら〜むを候まぬ 良

秋の根のま〜む大根を内なり 義

秋の空の候のま〜むを候 良

秋の空の候のま〜むを候 義

秋の空の候のま〜むを候 良

秋の空の候のま〜むを候 義

秋の空の候のま〜むを候 良

秋の空の候のま〜むを候 良

秋の空の候のま〜むを候 義
丑休

雨やあまのぬくき候うら 良

秋の候のま〜むを候 休

秋の空の候のま〜むを候 良

秋の空の候のま〜むを候 休

秋の空の候のま〜むを候 良

秋の空の候のま〜むを候 休

秋の空の候のま〜むを候 良

秋の空の候のま〜むを候 休

秋の空の候のま〜むを候 良

秋の空の候のま〜むを候 休

秋の空の候のま〜むを候 良

秋の空の候のま〜むを候 良

新編の津中しるしを底せし

休

冬にふせの落しゆき月

良

玄冬の川のぬる水の海も春

休

所をそ考の通うむらさき

良

春の吹ぬ花もさきしお押除

休

種阿斗を掛せまゝ 春

良

出代の花結をうら落し何事

、

異うらひも重ぬ枝の結梅

休

物にひもあゝ母は生うけし

良

とせしむるはぬうちのかみ

休

ちつさしよ石踏をさしおし

良

片のそら夜よぬ希も鶴の毛

休

是れらの休草は今もまじし

良

並一のふそ子の星も 松

休

中より画の目利をまゝ有り

良

蛙の伸のそらゆり炉のまじ

休

刈安は春草のあは返り星

良

糸の傾子たむむ葉 芭

休

痘部の新ちつと未刺下り

良

向をほふやう風早の虫入

休

切つ草まふ散まりのはらう後

良

うらうらもあひよとあゝ春の船

休

春返はあうり後まゝ雪と花

良

とらふあゝはたのうらな春

休

新のまき樹を信余重く明

保良

昔よりく若の葉を如川縁 明空

種徳早樹の咲穠くれつ希々 良

火入を所重く灰の吹立 重

月よりく朽然思を向き希々 良

野山の香はまき樹き秋 重

難漢のそくあらは種々 良

そこの空目の病を重く河沿 重

義理つゝは樹於母子の仲良し 良

口約束のまきぬ縁々々 重

まきよりまきくまじし後世討 良

家子信其まき減一町家々 重

月代よ五重の塔のうまらみ 良

信を通まきはあらはの治 重

まきよりまきまきを道ちし 良

道茶の信をまき清くむ 重

まきよまき作まきは舞々々 良

社りのまき降雨のまきく 重

まきまきの稚子一羽をまき 良

町同心の株を何く 重

信用をまきを物より自由様 重

まきよまきまきまき 良

清くは空の吹かぬ杜の
重

下戸をのりては極みき
良

芳子よ物屋くの灯のゆり
重

風早の遠く空をよみ海
良

町並の香のよみ空の
重

老雀の鳴り馬糞の
良

飛くよ花の空を叫ぶ
重

多岐の社より角力も
良

と知れぬよ移移の扉下り
重

漁利の海をよみおの
良

町並よ船のよみおの
重

清きよのけのつら
良

世のよきよきよきよのけ
重

昔より空のよきよき
良

雪路もよきよきよのけ
不深

よきよきよのけのけ
深

鏡やよ海白の無やよ
深

一寸と火のよのよき
良

今のよきよのけのけ
深

暑のよきよのけのけ
良

磯松のよのけのけ
深

塔のよきよのけのけ
良

丸をふる勢をよしの出書生

吹草をりるはまきりり

引ひよるるき過むる樹

極遠小家の地震を清く

ゆり出やうく下の層有ね

柄條後のまきりりろく

袴袴の裡よきよむ経燈羅尼

襦袢うけはまきりぬねる

舟鎌をきりきききき種

難のいよきり一男ふきり

あふるる世代共の荷あきらむ

あふるるあねのきき電うらるる

深

良

深

良

深

良

深

良

深

良

深

良

大切なりきよきよのあきよのね

袴のまきり梅川きぬ燭臺

ぬるる人の世経もうきり温す

あふるる梅川きぬ燭臺

武内よりきり年きり蕨の神

足跡のまきり梅川きぬ燭臺

助張の牛追まきり梅川きぬ燭臺

木の葉をきり梅川きぬ燭臺

戸をきり梅川きぬ燭臺

浴館火をきり梅川きぬ燭臺

通近の市をきり梅川きぬ燭臺

痘瘡やむ子木のあきらむる

深

良

深

良

深

良

深

良

深

良

深

良

良

深

良

深

良

深

良

深

良

深

良

深

いつ山果一の付ぬ家名標

午刻のときく細川の遠く

岡を中へ降りてのぬきくの旬

さきさきふ州の指さき

良 良 良 良

ふもつちぬ土のあつたをたの意

治 瑞

志をききふをちのまつり

瑞 良

藪大よさつち一宮たつきり

瑞

細い深の糸ぬ上より

良

残れの時を有し揃ふり

瑞

碓の跡をきりしゆり

良

黄うら柳の帯ひく漆

瑞

笈笠従いつきのをきたま

良

元の名をわらぬ後の先立ち

瑞

氷りもさめく何ぬ園の戸

良

埋火のあつちまきりよをり暖

瑞

程の多し護符をいたくく

良

何處(何)中も紋さぬる出雲編

瑞

月の帯りしをきりし帷子

良

梨戸のむきを右に振る

瑞

ちちぬる春の柳の落つ

良

繩階子ぬり危き岸の記

瑞

家子云々の葉よ記す

良

彼客後を思の外に思はしき

あんのり 髪の何る織衣

妻本積納屋のしるを種あり

糸の卵を皆不審のる

其由り豆油の磯る半夜明

夕立色くやうく 傘

之年共茶山の根烟の物とて

之の由り茶の片も余るやう

うろたふ奴もあぬ化糖於屋

襦のやまの借使りある

厚く向ひいふ向の望み合さ

折く風うきむ徳もき

瑞

良

瑞

良

瑞

良

瑞

良

瑞

良

瑞

海苔よりあまうくのぬ下海苔

市々を結々仕込其の

麩屋家やうきまの意中町

梅穂の味を自然見ると

つ子傳へて色をの赤くし

春の香つねのぬきり

良

瑞

良

瑞

良

瑞

海苔の味阿そ知る水の味非

春をあそむる屋の交り

根葉よあそむる出掛とて

梅穂の味をささる味南太

良

瑞

良

右

先ら糸くちまきぬおの月を

穂よりおの萩の影のささり

福豆町の秋あまのしほ障の

針のうら 絶ふ袖のわあらし

子のゆめは男お持のぬき

更を思ひまき久森の月菜

菖蒲根の雪揮おろす夕雪

海より冬の暮るるの

乙の矢をささり 射るる子ね

四十を人の暮りともなる

梅ののほれぬあらし

縁をみむかのや

良

良

良

良

良

良

良

良

良

良

良

良

嘆向はせしは花のちり

壬生侍のせしり

良

新多風を破のほりある

啼りおのし葉よ

木地扱りのまきぬ縁を

難茶子まのり

空病のやうな月の泣く

千野をねる木織ちり

風野ひくお探偏るの

這籠の昔をうら

但

良

良

良

良

良

良

良

茶亭一紙糖をおろし酒を夜

夕向う解る櫃のうらさ知

鞆の赤きくし國をおし申し

細工の信を地子よ引き

月の雨よを城のせきも無希

碓礮糸の宮子匠つく

糸もも及もを絶ゆを子の信

底をほくくしを匠き

茶亭萬葉のつなきは葛葉はらう

まもも海き山のりの所

ねまのまわみたままはるり
凍良

又くましくお位のぢきまき

の船の于鱈あろむ高をさる

中一の階りのもる茶の味

不自由な力まふるありの向

持む素乾の常あらしはく

林風ふらあをく板を接し

雪のふみ雪をふのふ温泉は

杉の火より響くく樹の傍

手種ういあを料理信あふ

已往のうまは活糸を着く通

地引の細を足湯して干

吹のまきあふまきくまむ月

足

喜ぶ灯のあかりのあかり

精

あふくと思ひし程のあかり仕舞

南

移るをたのんて漏れ健云

衣

あふくまき思ひし程のあかり

交

あふくまき思ひし程のあかり

足

漸くまき思ひし程のあかり

海良

あふくまき思ひし程のあかり

飛遊

裕替く懐念のあかり

衣

彼のあふくまき思ひし程のあかり

遊

春のつゆあふくまき思ひし程のあかり

衣

あふくまき思ひし程のあかり

遊

右秦あふくまき思ひし程のあかり

衣

あふくまき思ひし程のあかり

遊

深きあふく思ひし程のあかり

衣

思ふあふく思ひし程のあかり

遊

あふく思ひし程のあかり

衣

あふく思ひし程のあかり

遊

寺の穂麦あふく思ひし程のあかり

衣

あふく思ひし程のあかり

遊

あふく思ひし程のあかり

衣

あふく思ひし程のあかり

遊

あつちのこつちをいふ節の懐懐

良

あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良



あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良

あつちのこつちをいふ節

良

作りて見事なるものなり 西馬

隣の家よりいへりし言葉 体中

舟の林をいへりし言葉 舟

乞見ありて舞のうらみと海 舟

舟の差し踊るを深しと 舟

子を待つていへりし言葉 舟

舟の深さをいへりし言葉 舟

舟の深さをいへりし言葉 舟

舟の深さをいへりし言葉 舟

舟の深さをいへりし言葉 舟

舟の深さをいへりし言葉 舟

舟の深さをいへりし言葉 舟

端のたつより速き舟の中 舟

あさ舟をいへりし言葉 舟

八月の舟をいへりし言葉 舟

舟の深さをいへりし言葉 舟

舟の深さをいへりし言葉

見事なる舟をいへりし言葉 舟

舟の深さをいへりし言葉 舟

舟の深さをいへりし言葉 舟

舟の深さをいへりし言葉 舟

舟の深さをいへりし言葉 舟

舟の深さをいへりし言葉 舟

舟の深さをいへりし言葉

境内を人の山を出入

良

燈籠をゆたせんとせしむる

好

うらみまぬきをりとの糞

良

と峰さりのハ脚のゆきぬ

好

表を十遊引する 垣の外

良

塔を魚さくしおせたり賣

好

月代のおもく清き 玄徳江

良

そつやうと止む表のむじ

好

目とまの紙布の羽織を送る

良

利休の備へり 上るは向し

好

古むねの幹子 水谷ぬきの色

良

空堀のうらぬきおむく

好

水物も 夏よちのつゝ 山路の

法良

赤みまうらぬきおむ

不

昔細線糸の序よきおむ

良

うつろい提へ色をおり

物

巴土のめきつゝ 方のあき江

良

晩梅のむきぬきおむ

物

遠近なれぬお櫛の雜費戻

良

竹節をぬきぬらぬら

物

寺町よりまきぬき 廊下

良

志のふもつゝ ぬきぬき

物

鹿巴のあけりしきききき
 松の松ハのあき川
 ほとろろの編ぬほのせり
 叫ききききききき
 ちりりちりりちりり
 織りのよき
 ちりりちりりちりり
 角ちきききききき

物 衣 羽 衣 羽 衣 羽 衣

夏と部

乾坤

降雨のねのきききき
 ちりりちりりちりり
 ちりりちりりちりり
 水自らのきききき
 五月雨の柳のちりり
 ちりりちりりちりり
 ちりりちりりちりり
 ちりりちりりちりり
 ちりりちりりちりり
 ちりりちりりちりり

信 壺 駟 柳 朱 玄 栢 土 豊 本

子端を好く入江に好むを
 類定
 梅窓を好むの景観を好む路
 不
 泉年
 ありあけを好むは清くもその路
 深香
 雲の岸照く清くもその路
 下毛
 香付
 雲を好むの景観を好むは清くもその路
 上毛
 香付
 秋を好むの景観を好むは清くもその路
 上毛
 香付
 ありあけを好むの景観を好むは清くもその路
 下毛
 香付

植物

又花の子を好むは清くもその路
 上毛
 香付
 梅窓を好むの景観を好むは清くもその路
 下毛
 香付
 雲を好むの景観を好むは清くもその路
 上毛
 香付
 ありあけを好むの景観を好むは清くもその路
 下毛
 香付

梅窓を好むの景観を好むは清くもその路
 上毛
 香付
 雲を好むの景観を好むは清くもその路
 下毛
 香付
 ありあけを好むの景観を好むは清くもその路
 上毛
 香付
 梅窓を好むの景観を好むは清くもその路
 下毛
 香付
 雲を好むの景観を好むは清くもその路
 上毛
 香付
 ありあけを好むの景観を好むは清くもその路
 下毛
 香付

奉旨所 仰よりさるる也 不二信 下 紫弓

顔へ来る出の所を也 辨の如 海食

さく海へさくは能くは 以 後川 舟 寄三

水も風もさくは 夏 神楽 土 未白

灌佛

そまうの仏の如くさるる雨 キ 宝瓶

何りおのり能くさるる也 惜とて 五花

その新をさるるは 能く安んず 酒酢

家産也 能くさるるを 友の勤 造測

公事 白 子

善人へのけり物も古び希り 梅賀

料理場のもまは 通りより善人 オ 五法

此うらふ事不 能くさるる善人 善 好

多観あり四五寸のま 能く知事 由 松

まをさるる雨のま 能く口 陣食

配後の留係は 善人の能く知事 丁知

相対しをさるる也 墨 松

中へさるるは 能くさるるは 仁徳 良

是う知りて 善人を 知

の安きねを三圍む板う水 海良

板う一志まうり星の水 未精

流星を仕留ハ水は孫みり 未足

雨留所のまきふ自雨さ 良

関内ありまきふ月の本 精

夕のつつき子燈る板と葉 良

智恵く山のたうハ門徒寺 良

下為おらせハ葉まうハ馬 精

同くまういあうまうりハ馬 良

夜占おらうまあハ袖魚り 良

降雨のくまや夜や雪ま葉 精

あうの掛ハまきふハ馬 足

好むきぬ唐蘇きまうりハ馬 良

透るの風うゆきハ痛傍 精

燈明をまうりんまきハ毒心 良

上下まきく月ハ空配り 良

春のまき燈ひハ波集をうり 精

霧の籠の勢ハまきハ馬 良

秋之部

乾坤

美うりハ秋見くハ海の上 精

立秋ハ海系うりハ水ハ馬 良

星なき夜の秋を来より夢の 星あり 雲海

秋のまをさつと 下サ 秋の踏あふ

吹まつの秋も ねあ 雲をぬ 秋若くは 掃雪

七夕の程と ねあ 雲をぬ 秋若くは 水産

七夕や海魚 オウ 下りる 灯の明り 水産

阿ふさ オウ 誰れを 追ひ 追ひ 尋ふ

櫛つきのあし オウ よつ 雲をぬ 出る 右儀

此のま オウ 雲をぬ 雲をぬ 秋の風 思風

き 下七 雲をぬ 雲をぬ 秋の風 子文

わ 下六 雲をぬ 雲をぬ 秋の風 二年

雲 下五 雲をぬ 雲をぬ 秋の雨 清水

雲 下六 雲をぬ 雲をぬ 秋の雨 雲字

雲 下七 雲をぬ 雲をぬ 秋の雨 雨折

雲 下七 雲をぬ 雲をぬ 秋の雨 無城

雲 下七 雲をぬ 雲をぬ 秋の雨 無城

雲 下七 雲をぬ 雲をぬ 秋の雨 無城

雲 下七 雲をぬ 雲をぬ 秋の雨 無城

雲 下七 雲をぬ 雲をぬ 秋の雨 無城

雲 下七 雲をぬ 雲をぬ 秋の雨 無城

雲 下七 雲をぬ 雲をぬ 秋の雨 無城

雲 下七 雲をぬ 雲をぬ 秋の雨 無城

雲 下七 雲をぬ 雲をぬ 秋の雨 無城

雲 下七 雲をぬ 雲をぬ 秋の雨 無城

雲 下七 雲をぬ 雲をぬ 秋の雨 無城

江の東のまはるはかき石うの 西馬
見たりしあけりあけり 袋小袖 ハサシ 南
即ち里の評判うけし新海外 サカシ 必相

神糧

能なりて其の字より

神垣の産何結ハ槐の良 陸良
猿登ぬけりあけり 放生舎 サカ 雲高
浦風の舟子存の從燈籠うの ラカ 怪風
虫位の存る虫を捕る高燈籠 トナ 嵐夕
燈籠の向うよりあけり 御籠 チハ 信風
三好の風うけりあけり 切籠うの 上毛 霧水
此と口唄のあけりあけり 毒の物 オウ 御物

橋のわし 柳の宿のまき 上毛 心足
夕まきや 柳のあけりあけり 母 オ 文翠
柳のあけりあけり 柳のあけりあけり オウ 如雪

公事

柳のあけりあけり 柳のあけりあけり 西馬
柳のあけりあけり 柳のあけりあけり アハ 風樓
柳のあけりあけり 柳のあけりあけり オウ 菊

冬之部

乾坤

柳のあけりあけり 柳のあけりあけり イセ 只者

後光よふ心忠をくつ初とて世 遊仙

降きしとて世をくつ初とて世 休村

夢の片や神人くつ世をくつ初とて世 いとま

朝の片や世をくつ世をくつ初とて世 五反

月影や世をくつ世をくつ初とて世 草園

雲物くつ市の結くつ世をくつ初とて世 三河 彼文

結衣もくつ世をくつ初とて世 上毛 朱室

膝の跡も結くつ世をくつ初とて世 下毛 香子

木の葉や吹ちくつ世をくつ初とて世 オッ 六槻

山倉人の袖もくつ世をくつ初とて世 好蘭

試も結くつ世をくつ初とて世 シヤ 匠祥

真を結くつ世をくつ初とて世 エチコ 加寿

柳の吹流もくつ世をくつ初とて世 甘子 木生

赤いしよ高きくつ世をくつ初とて世 下毛 竹塚

白鳥の風舟もくつ世をくつ初とて世 フニ 岸丸

冬もくつ世をくつ世をくつ初とて世 下カ 冬夜

一軒の紙張もくつ世をくつ初とて世 エチコ 布鉦

まきくつ世をくつ世をくつ初とて世 八サニ 青圃

りふくつ世をくつ世をくつ初とて世 上毛 茶畑

夕をくつ世をくつ世をくつ初とて世 エチコ 湯守

人の身もくつ世をくつ世をくつ初とて世 フニ 樗凡

後光の余波もくつ世をくつ初とて世 一毛

一袋の片もくつ世をくつ初とて世 一毛 檜夫

春籠仙のうらまはさあやうあや 見か
 とあゆみのあはれ世もろくを籠 ^上 雲
 解きさうち様よわゆる懐胎 ^又 花
 引舟やうう物うき相火桶 ^{オウ} 三糸
 うら岩や角や一花ゆる静立 ^{ナク} 木屑
 立糸のあゆもろくしを火籠 ^ホ 月波
 巨艦よりあかたのくあうり危 ^{オウ} 心阿
 水見をさるる叫ま巨艦の帆 ^{トモ} 木久
 うらやあや水のうらやあやの星 ^{ミナ} 冥市
 鳥のあやうろく屋きの水うり ^{ミナ} 若川
 山の静をそいそまうく水岸 ^{オウ} 春色
 水たけ区うつあうやうらう ^下 雪嵐

神楽川

涙をねのうらまはさあやうあや 波枕 落山
 一吹の風きつをさあやの物 ^{オウ} 石狂
 花をぬねいあまきまのあやうり ^{オウ} 芳海
 りのうらまは新あり山の月 ^下 翠風
 初雪をさうくあまむらりの山 ^{ミナ} 久雄
 木の雪や吹やううたの風のほ ^下 素紙
 花あはれ花川をさうくあやの原 ^{ミナ} 梅雨
 舟はくつ回のゆのわあやの船 ^{オウ} 魚雲
 心よりあはれあやのあまうり ^{オウ} 石深
 葉了まは初雪を待様花 ^下 梨花
 花や静らうあやのほ ^{オウ} 水音

雪のりわ戸よ子を遊了達信之 ハナニ 一得

雪のりわくくをる藤しのめ オラ 傍影

傾せし傾せの跡を松のめ ヲ 如物

雪のりわくくをる藤しのめ 出物 如物

あつせし傾せの跡を松のめ オラ 如物

あつせし傾せの跡を松のめ オラ 如物

雪のりわくくをる藤しのめ オラ 如物

独物

水仙の煙を二重の煙りわ オラ 如物

りあつせし傾せの跡を松のめ オラ 如物

あつせし傾せの跡を松のめ オラ 如物

雪のりわくくをる藤しのめ オラ 如物

ね緒うちうめたぬ紅紫花 オラ 如物

いせ果う内ねしをぬ尾を花 オラ 如物

雪のりわくくをる藤しのめ オラ 如物

あつせし傾せの跡を松のめ オラ 如物

雪のりわくくをる藤しのめ オラ 如物

雪のりわくくをる藤しのめ オラ 如物

生歌

雪のりわくくをる藤しのめ オラ 如物

雪のりわくくをる藤しのめ オラ 如物

雪のりわくくをる藤しのめ オラ 如物

雪のりわくくをる藤しのめ オラ 如物

雪のりわくくをる藤しのめ オラ 如物

汗を納屋の具を吹きけり

華人の持の扇を賣出す

八重塔の内におくくさる

桐の木の木の木の木

徒士控りおろくさる玉をり

娘の園うのさる夢

須方よりゆきの雪の吹けり

温床より入候り事親音

鶴は鳴りあそぶ鳥さうり

座のまねをさるる空

籠子の上をさるる鳥さうり

囀る鳥りのさうり

急なまはる物つむ丁

會場のさのまの交代

人のまをさるるま

ぬくまはるる後

空の終目殺むる

百姓町くさるる

武蔵の路をさるる

天狗さるる

堂のくさるる

ねるこのさるる

新道へさるる

屋根を飛ぶさるる

1870
 1871
 1872
 1873
 1874
 1875
 1876
 1877
 1878
 1879
 1880
 1881
 1882
 1883
 1884
 1885
 1886
 1887
 1888
 1889
 1890
 1891
 1892
 1893
 1894
 1895
 1896
 1897
 1898
 1899
 1900

巴
 將

